

## 宗教と交通の変遷

北見俊夫\*

宗教的交通、初発の原点は、交易行為を含む漂泊と定住との交差にある。封鎖的村落外からの訪問者を神にみる「人神信仰」は、古代に彷徨した神々の遊幸と、中世遊行者の群像、そして今日に残る来訪神を育んだ。そこに果した山民・海民・諸職人の役割は大きい。定住農耕民もまた社寺参詣を通じて、一時的漂泊の旅に出て、かれらの文化に血肉を賦与した。

以上のように、宗教的交通史を通して、そこに展開された、多彩なパフォーマンスの描写を試みた。その伝統は装いを変えて、現代に魅りをみせている。

### Religion and Changes in Transportation

Toshio KITAMI\*

The original point of departure for religious-type transportation lies in the intersection between wandering (including trading) and permanent settlement. The "worship of human gods", which sees gods in people who visit from outside of the closed village, nurtured tours of wandering gods in the ancient period, clusters of itinerant priests in the medieval period, and the visiting deities that remain to this day. The role played in this development by mountain villagers, fishermen, and various craftsmen cannot be understated.

Settled farmers, too, went out on temporary wandering journeys, in the form of pilgrimages to shrines and temples, which, in turn, contributed much "flesh and blood" to their culture.

In this article, the author depicts the colorful drama that unfolds through the development of what we may term religious transportation. According to the author, while the external appearance has changed, this tradition (indicated above) is being revived in contemporary times.

交通ということばは、交易と併列され、それらの行為をさす古語は、タビ（旅）である。人間生活全般の反映を文化と表現するならば、それは時間的深さと空間的広がりとの織りなす綾といえよう。その後者に与える手段を交通ということもできる。要するに、人と物の場所的移動であり、日常的な生活圏外に出る、移動を伴う行為をいう。

#### 1. 交通現象の始原——神々の遊幸——

宗教的な営みが、生活領域において、よりすぐれて支配的役割を演じ、ましてや、「人を神にみる」ことのできた、わが国神観念の特質からすれば、神々の広汎な足跡は、ありし日の人びとの漂泊の現実を反映していると解される。古代の神話には、多くの若王子が、遠い地平の彼方の国々まで、美しい娘を

求めて妻<sup>つま</sup>覓<sup>ま</sup>ぎに、しきりとさまよい歩くさまが描写されている。妻覓ぎという漂泊の要因は、文芸的表現にすぎず、古代国家形成期において、大王を中心とする大和の族長ら支配者側の行動を描写したものであろう。換言すれば、アマツカミによるクニツカミの征服という行動をめぐって出現したものであるけれども、民族生活の深層部に存在する諸々の遊幸神信仰を反映したものとみなすことができる。

それにしても、村を訪れ来る神々に対する信仰は日本民族文化の潜在意志としてあり、本来それをもたらす人に対する信仰——人間が神の言行を代理する人神（Man-God）の信仰<sup>1)</sup>ということである。

#### 2. 漂泊と定住

##### 2-1 山民と里人・市

いわゆる遊幸神信仰というべきものが、その性格上、国家形成の歴史的時点に形成されるとはいえ、その時期において、定着農業は一般的には未熟で、

\* 筑波大学教授  
Professor, University of Tsukuba  
原稿受理 昭和60年7月2日

在来の狩猟採集の原始的生産も色濃く残留し、両者は併存しつつ交渉を重ねる状態が、意外と長く後世まで続いたと考えられる。

里人からみて山人と総称される「異人」<sup>ことひと</sup>に会ったという話は、近世の記録をはじめ、その後各地に伝承されてきた。また、山男や山姥など、山中に住む妖怪についての伝説は全国的に知られている。それらの伝承を醒めた目で解釈するにしても、すべて幻覚のなせるわざに帰することはできまい。むしろ、背後には共通の無意識の残留があり、かつて山中に住みつづけた人びとの存在と、里人との交渉を物語るものではなからうか。

そして、これらの妖怪たちは、不思議にも、市と密接な関係をもって登場する点が着目される。岩手県海岸の大槌の町などでも、市日には、言葉に訛があり近在では見かけない男が、毎度出て来て米を買っていったと伝える。類似の伝承は長野県松本盆地、とくに安曇地方や戸隠山麓地帯に濃厚に分布している。その市は暮の市や年頭の市についてである。そして、大食したとか、小袋や小徳利に限りなく物や酒を容れて帰るというモチーフになっている。これは、霜月祭の鎮魂の夜の山づとと取り易えて、里の種々な品物、食料をたくさん持ってゆかせた記憶の伝説化であろうと折口信夫は説いている<sup>2)</sup>。

市は、それぞれ封鎖的世界に閉じこもっていた人びとが、相互の接点をめぐり、神霊加護のもとに成立する聖なる「空間」であり、有史以前の山人と里人（農民）との交渉に胚胎していた。遊幸神信仰と遊幸する神の原質がもつとも示現し易い「場」であった。エビスという、「異人」を意味することばで呼ぶ神が、そこに祭られる信仰を生んだのも、以上のような文脈のなかで理解できるのではなからうか。

## 2-2 漂泊の海民

村里に定住するようになった農民が、村外の非定住民ともっとも古くから接触をもっていたのは山民であったが、あわせ考えなければならぬのは海を生業の場とした海民のことである。わが国の国家組織がまだ整わないころから、海を渡ってきた人びとがおり、やがて大和朝廷のなかに海人部として組みこまれ、なおその統合の外で生活し続けるものであった。海人部の主流の一つは、筑前志賀島や彦岐・対馬を本拠地とし、いわゆる海の名パイロットとして大宰府の海上交通に重きをなした。

かれら海民は、「板子一枚下は地獄」といわれる危険に身をさらす生業にたずさわることから、安全を

神に祈り、海の幸を神に乞うためからも、敬虔な“神の子”として神の意志を予知する能力にたけ、呪術的性格を生活の糧にするようにもなった。海人部たちのなかに漁撈よりもト占や芸能で生活を立てていたものがあつたのはそのためであり、クヅツ(傀儡子)と呼ばれる集団である。こうして神の信仰を根源的に体现する漂泊の民は、行く先々の村々で神秘的呪術者として畏怖の念と、一方では最高の崇敬の対象＝海神の化身とみなされて遇されもした。供物の献上を受け、一夜の宿を提供されたりして、普通なら多難なるべき漂泊の旅も、比較的容易に続けられたであろう。託宣神の代表ともいべき宇佐八幡一八幡信仰を伝え歩いたのもかれらの一派であった<sup>3)</sup>。

今日に知られている民間伝承資料によれば、福岡県糸島郡野北・岐志などは、かつて海人の根拠地として知られる。そこのシガとよばれる女行商は、それぞれ付近の農村に長年きまったトクイがあり、海産物をもって行って、春秋二季にトクイで穫れる穀物と交換する慣行があつた。その他に、暮にはオトビといって魚類を配り、トクイから鏡餅をもらう例になっていた。注目すべきは、シガが海産物と交換にもらう穀物をクモツ(供物)とよび、その感覚には神からの授かりものという信仰がひそんでいること、また、トクイでは秋の初穂をシガにあげないうちは、自分たちも食べないという習いについてである<sup>4)</sup>。

古い時代には、村外からの来訪者が、村人に対してある種の宗教的威力をもっていたと推測される例があり、九州では塩の行商人は特異な地位にあつた。塩売り自身が呪力の保有者と感得されていた民俗は豊富に伝承されている。このような信仰は、おそらく原始時代からの信仰とみなされよう。

海民の交易は、たつきのためであるとともに、強力な宗教性・芸能性を同時に内蔵しているもので、神とともに移動し、その故にまた、どんな未知の国へも自由に入ってゆけたのである。かれらの広汎な流浪の旅はまた、信仰伝播の歩みそのものでもあつたのである。海辺部から河川の溪谷を遡ることは、自然な発展的進路であり、内陸部に進入しては、信州松本平を拓き、日本アルプス穂高岳の名は、かれら安曇族の祖神、穂高見命の名をもってした命名であるといわれる。安曇郡などの地方とともに、その象徴的事例といえないだろうか。『日本書紀』第十卷に、「諸国の海人さわめきて命に従はず、すなわち、阿曇連の祖、大浜宿禰をつかはしてこれを平げさせ、

その功を奏す。よって海人の宰となしたり」とある阿曇族一派の行動に代表されるものである<sup>5)</sup>。

海民のなかには、歴史の展開過程にともない、漁撈のかたわら農耕を手がけ、後に沿岸地域に半定住の地をもち漂泊・回帰の行動様態をとるものもあった。あるいはまた、民間宗教者から芸能タレント集団ともいべき存在に変容しつつ、女たちは男とは別の職能に適応し、紅や白粉を顔に塗り、歯を染め、旅客にしなをつくって媚をうり、歌を唱う遊女ともいべき存在になっていた。その系統はやがて白拍子と総称される庶民的芸能の担い手になってゆく<sup>6)</sup>。ときあたかも、律令制は崩壊して莊園発達の時期をむかえ、中央・地方間を往来する国衙の役人、莊官、宗教者、職人、行商ら、旅する庶民の姿も現われ、街道筋に若干の宿も出現していた時代であった。

### 2-3 金屋神の徘徊

踏鞴や吹鞴を扱う鋳物師は、総称して金屋と呼ばれた。中央では早くから貴族や武士の需要に応じ、刀剣・仏具・調度類の鋳・鍛造にたずさわり、村々を徘徊しては農民のために鋤鍬や鍋釜を製作した。そうしたかれらの漂泊生活は平安中期ごろはじまり、老幼男女をとめない、相当数のキャラバンを組んで巡歴した。それぞれ特殊な集団を結成し、特有の神と神話を奉じていた。中世末から近世初期にかけて定住し、その業をやめて農業に専従したものもあった。金屋がいなくなった今日でも、全国的に金鑄護とか、金屋子とよばれる祠があるのは、かつてのキャラバン姿が強い印象を残したというよりは、かれらが村人から、特別畏敬の念をもって遇せられ、宗教的な強い影響力を与えていた証拠である。

金屋たちが使う燃料は炭で、その炭焼きもかれらの仕事であった。貧しいが、心の素直な炭焼が、女房の福分にあやかって黄金を発見して長者になったというモチーフの話は、豊後(大分県)の有名な炭焼小五郎伝説として知られる。そして、主人公の名前を変えただけで同じ炭焼長者譚が全国に分布しているのは、それらが源を一つにしている証拠であるとともに、金屋たちの漂泊時代を通じて、その徘徊が及んだ足跡を示すものであり<sup>7)</sup>、村の名にさえ命名され、今に記憶は消えることはない。

## 3. 遊行者の群像

### 3-1 漂泊と定住——「異人」の位置関係——

前節までにみてきた立場は、農耕社会に基盤をおく国家形成が進むなかで、共同体社会の農民を定

住・日常とすえ置き、漂泊・遍歴する山民や海民など非農耕民は非日常的あり方とするものである。前者が中央的なら後者は周縁的となり、周縁から中央へ訪問するものを「異人」とする関係でとらえてきた。そもそも、「異人」なる概念は、位置関係次第では変換可能なものである。漂泊者の立場からすれば、定住者こそ「異人」と映る。定住農耕民も故あって、共同体社会から積極的離脱をはかり漂泊の旅に出た。班田農民が、律令制社会に適応できず、本貫を捨てて諸国をさまよい、他人の門口に立って食を乞い求め漂泊民となるものもあった。

### 3-2 外来者歓待の系譜

ひとたび、遍歴の旅に出れば食物を作る余裕はない。一様に農民の戸を叩いて「給うべ」(下さい)といって食を求めなければならない。かくして、「旅」と他人の「恩恵」とが、切り離せないかわり結び合う。柳田国男は、旅の起源をここに透視した<sup>8)</sup>。求める側は乞うばかりでなく、有形無形、何らかの恩恵を相手に与え、感得させるものを持ち合わせていなければならない道理である。そこに祝福芸をもってすることにより、外界から訪れ来る人を神にみる民俗信仰の素地がすでに培われていたのである。

勧進の歴史は聖の歴史とともに古く、行基菩薩の出現はその先駆とみなされた。諸国を巡歴しては仏法を説き、曰く、行脚の旅は人間の前世の罪業を滅却する一つの行であり、堂塔建設は自他の滅罪を成就する方便なりと説く旅の論理には説得力があった。

かくして、その法統は、やがて念仏の教えを巷に説いた「市聖」・空也を生み、つづいて第二、第三の遊行者を輩出させた。また、当時の習いとして、剃髪して僧形を装えば、課税対象の埒外に甘んじ得たから、まずは形だけ聖になる私度僧、沙弥(半僧半俗のもの)の輩も続出する有様であった。このような事情のからみから、熊野・大峰など諸国の山々を道場として荒行を積み、そこで蓄えた験力(げんりき)を武器に、各地の庶民に加持・祈禱の呪術を施した山伏修験の徒のなかには、私度僧・沙弥の輩も多かったという<sup>9)</sup>。

農耕離脱者の漂泊の旅で遇される歓待の觀念には、仏教徒の教説が強化をはかるのにあずかって力となったとみることができよう。祝福・予祝・祝言を意味するホカイはコトホギから出た語で、ホイトが単なる乞食の意として蔑視の感をもつ限定的な用語に転落するのは、よほど後のことである。すなわち、神仏の名において祝言を述べ、託宣を告げて門口に

行む者は、例外なく遊行者であったのであり、漂泊・遍歴する呪術的来訪神も、出自をただせば定着農民であったものも少なくなかったのである。

### 3-3 中世的遊行者群像

時代の推移と、巡歴する空間の拡大、迎える側の心性の変容など諸要因から、宗教的遊行者の立場は複雑にからみ、重層的にして多彩な群像を呈するにいたる。中世社会はその受皿としては、かれらにとって、まだ聖感を有効に活かしうる時代的環境を恵んでいた。かれら群像の分析に精力を傾注した堀一郎は、中世における遊行者の群像を網羅し3つに整理・分類した<sup>\*10)</sup>。

平安末から鎌倉～南北朝期ともなれば、農業と非農業とは、およそ分化していたとはいえ、非農業的生産—手工業・商業、芸能などはまだ十分に分化をとげておらず、遍歴・行商の形態はかれらにとって生計を立てるうえで不可欠の条件であった。そこに当時の交通現象に内蔵されつづける宗教的要素が、重要な意味をもっていたことを認めなければならぬ。そして、中世末には大寺院の衰退に伴ない、その支配を離れ、幸運にも農民に転身するもの、あるいは大道芸人・万歳・舞々の徒が、諸国のどこかに本村とは別に群れ住んで集落を構え、その後裔たちは、そこを根拠地としてなお他国へ漂泊の旅に出かける生活をつづけなければならなかった。

## 4. 社寺参詣の旅

およそ、歴史を通覧するに、社寺参詣の旅は、交通史上大きな比重を占めるものである。定住農民もまた、一時的漂泊の旅に出ることがあった。古くは稲作・雨乞い祈願などのために遠出することが早くからみられたのは、その先駆的な信仰の営みといえよう。前節までにみえてきた漂泊民の旅に対し、ここでは立場をかえて、定住者の旅行きを考えてみたい。旅の時代的特色を概括的に要約して表現した一例に『民間省要』のつぎのような記述がある。近世中期に田中丘隅\*\*の手になるものである。

「四民共に行旅のことは、故なくしてすることなき

物也。士は君命に随って旅行し、農工商はそれぞれ家職の為、或は菩提に信を行じて国々を順（巡）礼修業する有り。余情の人有りて慰み遊山の為に旅行するは稀なり。」

田中は立場上、庶民の旅はかくあるべしという意識をこめていたのかもしれない。元和偃武<sup>えんぶ</sup>を一つの転換期として、平和な世の到来とともに、庶民の旅はだいふ活発になってきた。

霊験あらたかな社寺とは知りながら、多くの庶民がその社頭にぬかずくようになるまでには、なお、長い年月を経なければならなかった。旅に要する経費は、往時においてははなみなならぬものであり、政治、社会上の情勢がそれを容易に許さなかった。

### 4-1 “蟻の熊野詣”

奈良時代から平安時代の中ごろにかけて、貴族たちの試みに社寺参詣が文献に散見されるようになる。京都近郊の石山寺・石清水八幡宮など、少し遠出して摂津の四天王寺、住吉神社、大和の東大寺、金峯山、長谷寺、さらに紀伊の高野山、熊野三山などである。なかでも紀州の熊野目指して旅人の群が目立っていた。その旅する人びとの主体は、ある時期まで、天皇・皇族・貴族、やがて上層武士階級と特別な宗教者であった。

古代末期から中世初頭にかけて約1世紀間つづいた院政時代に、上皇・法皇らによる熊野三社参詣は、97回、平均年1回の割合となり、わが国旅行史上、異常といつてよいほどの盛況を呈した。京都から往復600km、約1ヵ月もかけて、一行のキャラバンは数百人から千人に及んだ。交通環境はまだ劣悪であったから、随行者多数を引き連れ隊列を組み、後世“蟻の熊野詣”といわれるほどの行列が、あえぎあえぎ熊野の地を目指した。信仰目的以外に、山法師（僧兵）勧誘、戦力増強手段でもあった。貴族中心の大規模な行列が続くかげに、敬虔な祈りを捧げる庶民の姿も折々は見かけられた。

都からの熊野路はまず紀州田辺に至り、海岸沿いに南下して那智および新宮に達する大辺路と、東へ山路を辿り本宮に通じる中辺路とに分かれる。前者はかなり後世になってからで、古代中世を通じ主要な通路となっていたのは後者・中辺路であったが、6年前から文化庁指定の「歴史の道」として復原・整備された。国道311号線と処々で交差するので、車中からも部分的に昔ながらのコースがしのばれる。

東国からの熊野詣にも往復とも京都および中辺路経由が多く、現在の国鉄紀勢線に沿う伊勢路はあま

\* (一)修験山伏系、(二)念仏聖系——時衆、鉦打、鉢屋、隠亡、勧進、生団子等のヒジリや、御霊会に発して念仏踊を経由して転回した多岐なる宗教的芸能者の一群。(三)俗神道陰陽師系——陰陽師、唱門師、御師、あるき神子、口寄神子、夙、院内、幸中、夷、大黒、舞々、万歳、言触。

\*\*近世中期の民政家。1663—1729(寛文3—享保14)、八王子の人、江戸に出て荻生徂徠に学び、八代將軍徳川吉宗に召され、荒川、酒匂川の治水など民政に尽力した。

り利用されなかった。一方では、往復何れかは北陸道を迂回している例がみられるのは興味深い<sup>11)</sup>。遠隔地、靈験あらたかな寺社詣は、一生一度の貴重な体験だから、未知の外界を貪欲なほどに見聞しようとしたからで、そのことは、後述する伊勢参宮など近世以降の庶民の旅にも大きな特色となっている。

遠隔地の熊野詣に、何故そのように人気が集まったのであろうか。当時参詣者誘致にきわめて不利な条件をかかえていたため、一種の財政政策として、民衆の受け入れに、当時の宗教界としては思い切った英断を下した。すなわち、僧徒（仏教徒・僧侶）を嫌わず、また不浄の問題で多くの社寺が女人禁制を厳しくしていたのに対して、熊野だけはその禁忌が解放的であったし、死の穢を問題にしなかった。

このようにして、古くから熊野詣には一大特色として女性参詣者の姿が目立った。熊野信仰を宣布する熊野比丘尼、熊野巫女など、布教宣伝材料である熊野縁起なども女性を主題にすることができた。

#### 4-2 お伊勢参りや巡礼

中世末期から近代以降、前代までの熊野三社に代って参詣客を引きつけたのは、伊勢神宮であった。蒙古の襲来撃退以来、昂まりつつあった神国思想を背景に、皇室の祖先神を祭神とする国民の宗廟的性格が助長されたことだけが原因ではない。熊野路への険路は人びとの信仰心をゆるがすものであった。そうしたなかであって、熊野への伊勢路の途中に、同質の聖地朝熊岳とそれに隣接する伊勢神宮の喧伝効果があらわれ始めたのである。現在の伊勢志摩スカイラインは、550m余の高さの朝熊岳を通り、山頂からの眺めはすばらしい。

近世には、「伊勢に参らば朝熊をかけよ、朝熊かけねば片参り」とさえいわれるようになっていた。朝熊岳山頂付近には禅宗の名刹金剛証寺があり、薬の<sup>まん</sup>金丹の本舗もあった。近世幕藩体制下、一般の旅行に厳しい統制が加えられるなかで、伊勢参りだけは聖なる信仰行為として特別扱いであったから、民衆側もこれに便乗し、参詣に籍口して旅に出易い情況が醸し出されていた。交通環境が全般的に好転してきたことはいうまでもない。中世以来御師・先達らとくに、旅の宗教家たちの熱心な宣布・教線拡大策が効を奏するときが来たのである。まことに社寺参詣は旅・交通の中核をなすものであった。門前町や、社寺が経営する宿坊施設の繁栄は何よりの証拠である。これらの旅に果す機能は、近代交通の発達した今日でもほとんど変ることではない。

中世中期以来、全国社寺参詣界の王座に進出した伊勢参詣は、近世期には通例、享保期(18世紀初頭)の50万人を頂点に、20~40万を数えた。純粋な宗教信心ばかりでなく、遊里として全国屈指の古市が外宮と内宮の間に存在したことも無視できない。「伊勢参宮大神宮へも一寸寄り」といわれた所以でもあり、あわせて奈良・大坂・京都を巡り、さらに四国の金毘羅詣りを兼ねるものが多かった。

社会構造・文化構造などに、幾多の歪を内蔵していた近世幕藩制社会のなかで、伊勢参詣をめぐり、時折異常ともいえる大量な群参となった民衆運動に注目しておきたい。宝永2(1705)年、明和8(1771)年、文政13(1830)年など数回にわたる「おかげまいり」と幕末の「ええじゃないか」である。何者かの演出による神符の降下を、豊年万作、幸運到来の瑞兆と受けとめ、参下向、つまり直接伊勢の地まで参宮の足を運ぶことが神意に叶うものと信じられたからである。このような信仰の背景には、日本の民衆に古くから根ざしていたユートピア思想が認められる。そこには脈々と伝えられてきた宗教、儀礼、芸能などが渾然一体化した熱狂的なパフォーマンスが発現し、民衆の封建支配に対する不満が発散され、活力の再生をはかることともなった。

日本人ならば、「一生一度のお伊勢参り」といわれたのに対し、早くから、数ヶ寺を廻る巡礼や一つの社寺に一定回数参る風習が発生していた。千社詣で・西国三十三ヶ所・四国八十八ヶ所霊場巡礼、百度詣で・千度詣でなどである。

#### 4-3 都市と門前町とを結ぶ私鉄・バスの繁昌

わが国の陸路交通路を通覧してみると、伝統的な「みち」はおよそ2つの系統に大別できよう。律令国家の時代にその骨格ができた主要なみち——今日真っ先に新幹線が敷かれたような——は、主として政治・軍事、経済上の必要から、公用を帯びたものであった。これに対して、社寺参詣に代表される「信仰のみち」ともいべき性格の街道が、今日においても大きな役割を演じていることに注目したい。

新春初詣での盛況は、ますますエスカレートする傾向にある。その多くの人びとが年を重ねて踏み固めてきた参詣のみちは、歩く時代から乗る時代へと推移し、そこに鉄道が敷かれバスが走っている。大きな都市から郊外に延びる交通機関は、日常朝夕は通勤・通学路線の観を呈するが、敷設のいきさつと団体乗車の様態を通じて、多くは社寺門前町に結びついていることが印象的である。早くから聖地巡拝

コースが開かれていた関西方面では、大阪・高野山間の南海電気鉄道、大阪および名古屋と伊勢神宮とを結ぶ近畿日本鉄道。関東に眼を移せば、東京の浅草と日光を結ぶ東武鉄道、上野・成田山間の京成電鉄、池袋から秩父巡礼地へ延びる西武鉄道、品川・川崎大師間の京浜急行などがある。

### 5. 年に二度、日本列島にみる現代の民族移動

年々歳々、盆・暮に、日本列島で一定の方向をもった「民族移動」ともいわれる現象が繰返されている。帰省列車・バスの名が定着しているように、故郷をみざす旅行者の群がひとしきり続き、数日後、また仕事をもつ都会などに引返してくる。鹿児島地方で他郷に出ている者が正月に帰省するのをオヤゲンゾ（親見参）といっている。

先祖の霊の祭りといえば、今日ではもっぱら7月（一部大都会以外は1ヵ月遅れ）中旬のお盆行事を指すが、古くは年末から正月にかけても、一年を折半した2つの機会に先祖様が各家庭に帰ってこられ、子孫の祭りを受けるものという考え方があり、現在、東北地方などでも大晦日の晩に「ミタマノメシ」（御魂＝祖霊の飯）を供える習俗が行われている。このことは文献上でも確認できる。例えば清少納言の『枕草子\*』や吉田兼好の『徒然草\*\*』に明記されていて、その伝承性の根強さを知るのである。

上記二期の旅行者群のすべてが、今日帰省のためばかりでないこともたしかである。国内の民族移動だけについていえば、その機会は、定住者のもとを訪れる祖霊来臨の折であり、その場所は漂泊者の回帰すべきところということになるのであろうし、国外への移動は、一見、全く別種の要因によるものようであるが、過去から慣らされてきた一時的漂泊の空間拡大と受けとれなくもない。無意識の残留として、芭蕉翁の言\*\*\*をかりるまでもなく、そぞろ神の指喉しゅうにより、しきりに他郷の空へと旅立つ。この得体の知れない旅神の呪縛は、昔も今もかわらぬ「旅」を貫く本質のようである。外国人も指摘する日本人の旅好き、その根源は、本稿でみてきたことどもの総括として、潜在しつづけていた民俗が、折々

\*「……なべての月には見えぬ物の師走のこごりのみ時めきて、亡き人のくひものに敷く物にやとあはれなるに……」

\*\*「……なき人の来る夜とて、魂まつるわざは、この頃、都にはなきを、あづまのかたにはなほする事にてありしこそあわれなりしか……」

\*\*\*「……片雲の風にさそはれて漂泊の思ひやます……そぞろ神の物につきて心をくるはせ道祖神のまねきにあひて取るもの手につかず……」（『奥の細道』）

の触発を受けて顕在化するのではなからうか。

### 引用文献

- 1) 高取正男：村を訪れる人と神、高取正男著作集1、法蔵館、1982、77頁
- 2) 折口信夫：翁の発生、折口信夫全集第2巻、p.388、同：第10巻、p.4～5
- 3) 北見俊夫：宗教的交通史と巡礼、伝統と現代59、1979
- 4) 北見俊夫：市と行商の民俗、岩崎美術社、1970
- 5) 3)に同じ
- 6) 三隅治雄：芸能史の民俗的研究、東京堂、1976
- 7) 柳田国男：炭焼小五郎が事（『海南小記』所収）
- 8) 柳田国男：行商と農村（『定本柳田国男集』第16巻）
- 9) 3)に同じ
- 10) 堀一郎：我國民間信仰史の研究(二)、創元新社、1953、p.751
- 11) 北見俊夫：信仰のみち、みち、No.56、日本道路公団、1984

### 参考文献

- 高取正男：民間信仰史の研究、法蔵館、1982
- 網野善彦：日本中世の民衆像—平民と職人—、岩波書店、1980
- 網野善彦：遍歴と定住の諸相・中世の旅人たち（『漂泊と定着』所収、小学館、日本民俗文化大系6.）1984
- 新城常三：新稿社寺参詣の社会経済史的研究、塙書房、1982
- 新城常三：庶民と旅の歴史、日本放送出版協会、1971
- 堀一郎：日本宗教の社会的役割、未来社、1962年
- 堀一郎：聖と俗の葛藤、平凡社、1975
- 西垣晴次：ええじゃないか—民衆運動の系譜—新人物往来社、1973
- 西垣晴次：お伊勢まいり、岩波書店、1983
- 樋口清之：旅と日本人、講談社、1980
- 大林太郎：海と山に生きる人々（『山民と海人』所収、小学館、日本民俗文化大系5.）1983
- 桜井徳太郎：日本民間信仰論増訂版、弘文堂、1970
- 北見俊夫：旅と交通の民俗、岩崎美術社、1973
- 北見俊夫：閉鎖社会と歓待、月刊百科、通巻210号、平凡社、1980